

他説

### 明治の学校教育

佐伯史談会  
顧問 山 田 平 之 丞

教育は衣食住に指標を興え、文化の進展に寄與し、人類生々發展の基盤に培い、真善美を宇宙に拡大してかく大きなしごとで、人世に於けるドラマでもあり、シヨワでもある。しかし間断なく演出されているため、その一分科である教授の如き、演劇などのように個々を保存するのでもなければ、再演するのでもない。そして長い期間テレビ文化がなかつたから、録音録画ということがでさなかつた。さすれば後に掲げるところの教壇実況速記の如き、日本で、吾世界で敢て唯一無二ではないならうが、貴重な存在であるに断言して憚らない。これは明治三十三年、おが御土佐伯小学校一年の算術教授の速記で、教師は佐藤宗佑、速記者は子爵毛利高兼。

毛利高兼子爵(鴻山公)は佐伯藩十三代、毛利式速記の創始者(故に證して速記院殿)。明治の初樹遯へ留學後旧領地佐伯で悠々自適されて居た際、御子息が雄株方を三の丸旧城の遺構犬書院を用いていた佐伯小学校に入学させた。そして度々その授業を參觀し、その実況されたのである。

高兼公は今の言葉でいうと極めて平民的民主的な方であつたが、それにしても昔の殿様としては、恐れ多いが甚かこまやかすぎる。まことに勿体ない話である。

この授業速記を讀むと、漸く曉を告げた明治初期の小学校教育の實際が、まざまざとまぶたに浮かぶ。(話及

以下意識的に横道に入るが)維新になつて、全国津々浦々山村水郭、役場学校が設けられる。しかし教ける人は在浦に役人や先生になる人材がない。文字を解する人がほとんどないからだ。そして新しい教育をうけた師範出の教員はまだ養成されてない。それでおが御土南郡地方では禄をばなれた士族左氏が、第二の人生として役人や先生として出立したのである。こういう人たちは藩学四教堂で勉強して居たから、役場の事務をとつたり、こともを教えたりする素養は十分にあつた。だから此の時代の先生たちは、出がでてあつたため、のんたくれでもへんぶつても、かうならでもおつちよこちよいでも、一種独特の風味、持味があつた。左の一文をお讀み下さい。

#### エネルギー氏物語

これはずつと明治大正頃の話。今、市部で問題となつている暑中休暇が四十日あつた時のこと。  
その時分は蕨繁のため繰替をやつたとしてたら、そのやつた分を夏休みの十日で補充するしきたりゆえ、そんなことした学校では、七月二十一日からの特製の休みが八月一日からでなければならぬ。しかし天さかる節の下階では、そこはまあまあよろしくやつて、日誌も出巻簿も出席簿は月末まで出たことに記入して置いて、学校の教科書も雑記帳も教鞭から解放された海の子が、全裸の黒ン坊すがた其のまんまで、宿直の先生すら居ない学校の運動場を占拠することとなる。  
これは其の第ノンキな頃の話、僕の那のある村では、村の西のはじめの部落に本校があつて、それから東方へかけて、次々の三部落に分教場が一つ宛あつて、とても交

通不便な漁村であつた。それでよくこの手前前に述べた——をやるので、担当の郡視学、現場をおさえてウンとやいとすえてやろうと、手ぐすね引いて夏休みになるを待ちかまえて居た。

七月二十一日、郡視学は此村巡視を決意した。郡役所所在地の城下町船着場に出た視学は、此時既に氣早くも学校を急テンボにかたずけて、帰宅中のその村の分教場の先生達を渡海船の中に発見した。「おのれ見て居れ。」と視学は腹に爆弾を蔵して、見て見ぬふりして其村行き、の船に乗りこみ、船によつて最も遠い島の分教場の方から洗つてゆき、其の日の午後四時ごろ本校についた。そして職員室で校長に面接した。流石に本校は真面目に授業をやつていた。

視学「特に校長、暑中休暇はいつかからかぬえ。」

校長「は、繰替をしましてたので、八月一日からです。」

視学「しかとそれ間違ひはないだらうねえ。」

校長「間違ひはありません。」

視学「分教場もそうだらうねえ。」

校長「左様です。」

視学「うそを言いたまうな。分教場はもう休んでいゝぞ。」

校長「そういう事は毛頭ありません。」

視学「左まり給え。僕は三つ分教場とも皆見て来たのじや。そしたら雑も居らん。若はそれでも業として居るといふのか。」

校長「……………」

真向微塵とやられて、校長一言もなく悄然たり矣。視学は追ひ討ちをかけるように、なおも威丈高になつて、視学「教案を見せ給え。」

そこで校長は職員全部の教案を取りまとめて、視学の

前の机に出すと、

視学「校長のはどうした。君も訓導として学級をもつて居るなら、教案がなくちやならん筈じや。」

校長「ありません。」

視学「どこにある。出し給え。」

問いつめられて校長は胸をポンと叩き、朗らかに、

校長「これです。これ即ちキヨウ案です。(註胸は教

に通ず)

視学「馬鹿ツ。君は視学を馬鹿にするか。」

朝から、やくやくして居た日和たつたが、於是百雷一下

した。

視学「帰る。般を用意し給え。」

校長「まあ、そうおつしやらすに……………。どうぞ今

晩はおとまり下さいませ……………。お帰りをさると申しても船はおりません。」

視学「そんなら陸行する。」

校長「あの峻の多い坂道が……………。これから夜にかけ

てどうして越されますか。」

これは校長の申す通りで、此の村から城下町、海上五

六里、もう日俄前とおつては船便はなし。陸行するとして

も猪、猿の通うような山道、これまたゆうに五六里、

しかも夜にかけてといふんだから、視学もあきらめて不

承不承泊まることとなつた。

校長は家族を生れ故郷の城下町において、單獨自分一

人で学校の宿直室にねとまりして居た。視学もそこにと

まつた。

嵐の後の気まずさで、二人とも何だか気分がチクハグ

して居た。やがて夕飯んがすんで、蚊が多いので二人は

早目に蚊帳の中に入った。

元来この校長、朝からな楽楽天家であつて、まじりも

友つぷりの話をして、視学の気のもつれをどこうとするけれど、視学は笑わない。百計つきたところに、

視学「君、今の時勢は理科教育を振興せねばならぬ時じやが、君等も其の道の本を読んで居るかね。」

校長「ハア、勿論それはよく心得て、若い教員にまけないように勉強して居ます。」

視学「それは結構じや。ぢやあ聞くが、エネルギーとは何かね。」

校長「知って居ます。カーネギー氏の弟でしよう。」

ここに突つて視学は、ブツと吹き出し「たかと思つたと蚊帳の中をハラを捲いて笑ひころげた。朝からのグロツキーはどこへとんでうせたまら。

因々に申す。話のオチを語るは興がめた事だが、校長視学の機嫌をなおしたいはつかかりに、おざとエネルギーとカーネギーを兄弟にしたいかといえは、夫子曰く、

「そうではありませぬ、全く私知らなかつたのです。エネルギーとカーネギーと口調が似ていて、兄弟のようにあるではありませぬか。」

誰か今更の世に居るこの校長に、この小文章を読んで聞かせて下さいませぬか。

(この項の小文、昭和十一年七月大分県師範附属小刊「新教育」第百五十二号に載せたことあり)

### 懐旧書翰

(はじめに) この項は次々算術教授藤原は、昭和五年十月発行の「式速記学校校友雜誌」(団體)に掲載されたもの、山田藤原の提供、原文のまま全文掲載。(もと脚註は別紙に載せた)

### 懐舊談 佐藤宗佑

謹呈日に著し暑き相加はり候處、研究生諸君には益々御奮勵、斯道の爲日々御研鑽の段誠に欣喜奮躍に不堪

候。私は今回三十八年間の教職を完了し閑散の身と相成り餘生を好む道に送る事の出来候は偏に毛利家の永

年の厚き御庇護と大方諸士の御援に依る處と深く御禮申上候。今因退職に際し數ハ等瑞寶章御下賜の恩命に

接し感泣罷在候。何卒將來に於て浪々の宗佑をして餘生を誤らしめざる

やう御指導被下度御願申上候。百拜左に懐舊談として速記の昔き申上げ

研究生の御参考にまで當時の速記文字並に算術教授の筆記録別便にて御

送付申上候。(五・六・廿八 宗佑)

毛利式速記学校校長殿研究生諸君御中

私が毛利式速記を習ひ始めたのは明治三十三年六月で今から三十一年前であり

ます。其習ひたいと思つた動機は斯様であります。

私が佐伯小学校に奉職したのは同年四月一日で川原木小学校から月俸十二

円で轉じて來たのであります。私の受持は尋常一年で男児童七十餘

人、随分大きな学級でありました。教室は三〇九の一番廣い書院であるが何

佐藤宗佑(既故人)

速記道

△昭和五年三月末  
△平八年勤続(空背)の長き、昭和の初期は普通校長で二十八年が相場といふが敬感

△昭和五年六月二十八日  
△毛利式速記学校校長は毛利高純子爵

△今から五七と七〇年  
前

△當時は佐伯尋常小学校で三〇九旧御殿が校長は谷田藤太郎

△男女別バグラス完成  
をしていた

△館頭前(移つた御殿)は全くその右のついで  
建てつた書院

分りも昔の儘の建造物でありますから設備が不完全でありました。私は其多敷の児童を一人で受持つたので随分手の届かないことがおつたらうと思ひます。其上、野人禮に爛はらずで参観者なとに對して失禮な事があつたらうと思ひます。

敷敷、二人掛の机、正面に墨坂、教卓、生徒は教壇の上から授業。

或日一人の紳士が貴婦人と子供衆をへれて参観せられました。私は誰であるか知りませぬでした。後から矢田校長から今日毛利子爵と奥様が居の教授と参観せられたと承りビックリしました。同時に自分の光榮と参観なされた理由を感じまして(當時御嫡男高亮様入學)教案に念を入れるやう、言葉や改めるやら随分骨を折りました。毎日例刻には子爵閣下の参観があるの流石の私も五月頃とはいへ随分、服の下に汗が出ました。併し夫がため教授は餘程眞摯的に向上しました。

△佐伯小学校校長矢田豊太郎  
△子爵毛利高亮夫人

或時、子爵閣下が、今日は君の教授を速記するからと仰せられるので私迅速記すると云ふのは鉛筆で早く其要點を記す事だと考へてなりました。

△後援算術授業の研究會

時は明治三十三年五月三十一日へ此日は學校の研究會で私日番に當つたのであります。午後一時から算術の教授に掛りますと子爵は教室の後方で頻りに鉛筆を動かされるので私は何をおもひ書きになるのかと思ひ机間巡視の際鳥

渡り見ますと何やら一向おけの判らぬ丁度短冊のやうなものを書いてあるのであれが速記文字かな、おれで話が書けると思ふ不思議なと實は可笑しく思つて教授を了りました。

叔翌朝閣下は一冊の帳面を持って來校され昨日の算術教授なりとて校長に目せ自分にも見せて下さつたへ別冊の算術教授傍聽録、これは今日まで私が秘藏したものです。一度ビックリして拜見しますと教授の始から教師の發問、児童の答等落ちなく記録されてあるので三度ビックリしたのであります。

此時、速記と云ふものは不思議なものである。人の言葉を落ちなく寫すと云ふ事は、これは面白い、一つ研究して見たい、併し出来るか知らんと思つて閣下にお尋ね申すと既に小寺、矢田、桑野寺、杉原など習つて居る。習ひたければ研究せよとの御言葉に、爰に始めて同志の人、阿崎、須田、大賀、遠城寺等と入門し習ひ始めためてあります。それが明治三十三年六月で本年で三十一年前に當ります。其當時の練習帳が別冊の速記帳の殘骸です(第八冊目で明治三十三年七月十日)勿論、今日の文字に比すれば雲泥の差はあります。此文字から今日の進歩した速記文字となりたる其経路を考へたなら、校長先生が多罪研究に研究を重んじ、

△小寺豊太郎  
△矢田  
△桑野寺  
△杉原  
△阿崎  
△須田  
△大賀  
△遠城寺  
△在藤宗祐の速記練習帳

長先生が多罪研究に研究を重んじ、

△速記は毛利を伴  
△イッ、留學より  
△毛利式、留學より  
△時、速記、手、

工夫を積まれたることなど卒直に判らざると思ひます。

それから私共は入門して毎日學露館又は魚市場の事務室に於て午後七時から十時頃迄、親しく御教授を受けました。小寺氏が朗讀と少々係で練習して呉れました。二月半位で各生とも三百字ばかり書くことが出来るようになったのです。最も成績の良かったのは遠城寺で三百字を越してをつたやうに思ひます。私は速度よりか後の反文に時間を取らぬ様にと思ひ、成るべく丁寧書きました。三十一半目に出して解しましたが生派に讀まれます。別冊を御覽下さい。

研究して漸く判りがつた時、其年の十月松浦小學校に轉勤を命ぜられた遺憾にも廢學の止むなきに至り遂に今日に至つたのであります。併し消滅したかではなく潜在觀念として腦底に沈んであるのを、今日退職して一切の公務を放棄した自分は再び當時の速記文字を呼び還へして好む道に精進する事は實に愉快に堪へませぬ。  
自今速記の新式文字を研究して後れ走せながら、所謂枯木土山の賑で、何のお役にも立ちませぬが、せめて御校の隆昌と研究生諸氏の健在を祈りたいと思ひます。

算術教授傍聴録 二冊あります

△文科書世考の判文  
△右側にある毛利  
△左側の毛利家は住  
△速記した文字と普通  
△文に類訳すること

△小野正 練習帳を  
指す

△鶴見町松浦小學校  
△速記研習會

一冊研究生諸君に御目にかけてます  
△子爵閣下の自筆です  
一、三十年前の毛利式速記文字の實際  
△佐藤の練習帳、研究生諸君には  
能く見て下さい。そして毛利式の  
發達せる歴史を考へて下さい。

○算術教授傍聴録

明治三十三年五月三十一日佐伯

尋常小學校第一學年(午後一時)

△先生 禮、よし。  
皆おとなしうしませぬか、どの組が一番まっすぐかな。大變、皆今日中々御行儀がよいです。山縣さんごつとこちらにおら(粗)いて。  
心算！ 今日日算用を一つしませう。誰か紙を買ひに行つた人がありますか  
△(生徒手をあげる)  
澤山ありますな。よし。此紙が、  
此紙が三錢します。此紙は二折あるを二折は二十枚あるのです。此紙を二折買ふのは何錢を拂ひますか  
△(生徒) 六錢であります。  
△(先生) さう出来たん手をあげて、よし、それがよい。又體が歪むた様にあつたので、今度はゆすい紙を買ふのです。此紙が今度は二錢します。この紙を三折買ふのです。三折買ふのは

△教授者 佐藤宗佑  
△速記と反文  
△毛利初稿子爵  
△佐藤算術教授會  
(研究校録)

△山縣 憲  
△心算 暗算のこと  
△日算 暗算のこと  
△算術の計算のこと

△用本葉紙  
△藤沢市立物産館  
△七〇四物産館  
(本会發財委員)  
△生徒の姿勢の乱れを時  
を直す

何ぼ錢を掛ひますか。高橋さん。

○高橋 六錢であります。

○先生 六錢と出来た人手をあげて。

よし。夫がようございませう。今日は色々算用します。ざうりや、皆算用が上手になつたから色々算用します。

色々算用を。戸倉さんお行儀はどういふんだ。今度は墨の算用をします。

此墨が二錢します。二提買うたら何ぼ錢を掛ひますか。春水さん。

○春水 四錢であります。

○先生 さう出来た人手をあげて。よし。四錢になります。エー今度は筆の算用をします。小野さんは話をするぞ。エー始め先生が筆を二本買ったのです。其次に三本買った。總體で何ぼ買ひましたか。關谷さん。

○關谷 五錢。

○先生 まだ違ふ人。豊さん。

○豊 五錢。

○先生 まだ違ふ人。安永さん。

○安永 六錢であります。

○先生 まう一度言ふから聞いてんやない。始め二本買ったのです。其次に三本買ったのですぞ。X X Xさん。

○X X 五本であります。

○先生 高橋さん、これを算用して見ませう。

○高橋 一本二本三本四本五本  
○先生 何本と先生が言つたのに錢と

△蟹田高橋大郎

△高橋さん

△安永さん

△春水さん

△戸倉さん

△春水と速記はどつたか正しくは速記春水

△小野源一

△關谷善門

△(不用)

△安永正道(後大分師)

△高橋さん(高橋大郎)

△名前がききとれなかつたのであろう。

△筆を二本と、三本示しながらであらう

△一本一本をふれなう教える(以下同様)

言うてはいけませぬぞ。分つた人手をあげて。川野真一さん。こゝに先生は何本持つてをりますか。

○川野 五本

○先生 川野さん算用して見ませう。此内戸倉さんにやりませう。後藤さん。これは何本。

○後藤 三本残ります。

○先生 さう出来た人手をあげて。よし。やめて。エー今度は本の算用をする。先生が皆に見せうと思ひまして、かう云ふ書物、こゝにある書物は、こゝ、どこの書物ですか。戸倉さん。

○戸倉 西洋。

○先生 こちらにあるのと違ひませう。今先生の持つてゐる方は總體何冊あるか。勘定して見ませう。

○生徒 一冊二冊三冊四冊五冊六冊七冊。

○先生 盛太郎さん。

○盛太郎 七冊あります。

○先生 こゝに七冊あります。西洋本が何冊ありますか。調べて見ませう。皆手を下しませぬか。

○生徒 一冊二冊三冊四冊五冊六冊七冊。

○先生 こちらの西洋本は七冊ありませう。見とんなさい。此中からあたしが二冊取りませう。あとに何冊残つてゐますか。山縣さん。

△若島川野真一(又)林本店勤務

△和後(半)でなく半(半)半ならん

△先生が手に持つてゐる本を冊づつ机の上に置き、生徒がそれを見て数をそろえて教える

△生徒の姿勢や、くすいて机の上に出すまの多かつたか

○山縣 五冊であります。

○先生 それぢや之を調べて見ます。後藤さん調べて見ます。

(此時遅刻の生徒数壇の前に来る)  
吉田はどうして遅れたのだ(何か答へたれど聞えず)

草履をよく揃へて置かぬといかぬぞ。ホーラ今度亦茲に……みんなに見せうと思つてかういふ物を持って来た。

茲に鳥が何ぼとまつて居るか、調べて見ますぞ。青山さん。かう云ふのは、どう言ふて算用しますか。

(生徒少しく騒出す)

一羽二羽三羽四羽ありませう。此四羽に、こちらに居る二羽を一所にしたら何羽になりますか。ソリーヤ、みんな一緒に勘定ませう。

○生徒 一羽二羽三羽四羽五羽六羽

○先生 六羽ですな、此六羽に又こちらの一羽を足したら成……浅利さん……何羽になりますか。

○浅利 七羽であります。

○先生 さう出来た人、手をあげて。ソロー又之を調べて見ませう。

○生徒 一羽二羽三羽四羽五羽六羽七羽。

○先生 サ一體が歪んだ人が出来たぞ(遅刻生徒来る)お辭儀をせぬか……まだく……どうして遅れたのか。田田どうして遅れたのか(答えたれど

△実録を用い直観に新へ且、実験的を極業である。

△以下遅刻生か何人かおまが手頃の検査である。昼食は自分でやっていたらう。

△船頭町様書利考

聞えず)早う来ぬといけませぬぞ。又ん女、遅れぬやうにせぬといけませぬぞ。石盤出して。道具を出したらまつすぐにしませぬか。後藤さん體が歪んで居るぞ。浅利さん、どちらを見て居るのですか。大變まつすぐになりましてぞ。今度は石盤で算用しますぞ。

エー先生の言ふ力を能く聞いて書かぬといけませぬぞ。日本數字で一から七まで書きます。何者あり)黙つて書きて書きますと呼ぶ者あり)黙つて書きて書きます。出来た人、手をあげて。毛利さん出て書きます。安永さん平川さん。伊藤茂平さん。吉田準一。宮本さん。サ一おとの象はまつすぐに見て見せぬといけませぬぞ。宗五郎さんほどこを見て居るのか……消さぬように書かぬといけませぬぞ……サ一、エー茲に皆の書いたみを調べて見ます……一緒に。

○生徒 一二三四五六七

○先生 是は一つも間違つて居る所がないから丸をやりませう。中々字が良く出来てをります……一緒に

○生徒 一二三四五六七

○先生 これも間違つてをりませぬか。四といふ字が長過ぎますぞ。……これを調べて。

○生徒 一二三四五六七

△仲所後藤政二(五家後藤真吉兄)

△毛利高亮(毛利宗高長男)

△平川田治(後藤舎)

△宮本兼文(若し)

△黒川宗五郎

○先生 これば及んな書様が、ようございませうか。横しの方と續けの書かぬと、いけませぬぞ。

○生徒 二二三四五六七

○先生 これも間違うてをりませぬ、よく字が出来てをります。

○生徒 一三三四五六七

○先生 こゝに於るうちで、どの字が一番悪うございませうか、添谷さん、添谷萬次郎さん。

○先生 四の字が大變長うございませう。

○生徒 一二三四五六七

○先生 これも間違うてをりませぬ。

○生徒 一三三四五六七

○先生 これば、つばり間違うてをりませう。一三三きり、よいかれども三三は、いけませぬ。まだ五の字がぬけてをりませう。サ、今度は皆始から算用します、一緒に。

○生徒 一三三四五六七

○先生 今度はサカしから算用します

○生徒 七六五四三二一

○先生 石盤けして今度は算用數字で、一から七まで書きます。サ、留書きなされ。戸倉さん、どにをを見るのか、みえを體をまつすぐに返して書かぬかいけませぬぞ。田村宗一さん、大竹さん

△大竹宗一さん

△逆に数える

も、體が曲つてをる。出来友人は手をおけて、皆中々早う出来るようになつたぞ。關谷さん、青山さん、原田さん、伊藤さん、山崎さん。あと、衆はまつすぐにして見てをります。次に書かせますから。サ、及んなのを調べて見ますぞ。一緒に。

○生徒 一二三四五六七

○先生 間違うてをりませぬ。これは良々出来てをります。丸をゆります。これを調べて見ます。

○生徒 一三三四五六七

○先生 これもよく出来てをる、へい

○生徒 一二三四五六七

○先生 これもよく出来てをる、サ、

○生徒 一二三四五六七

○先生 へい

○生徒 一三三四五六七

○先生 これも間違うて居りませぬが、ズーリと下の方が、さがつてをりませう。算用數字は吉田さん、どつちから書くのか、吉田不答、月本さん、どつちから書きますか。

○月本 (左手を伸出して) こつちから。○先生 算用數字は月本さんの言ふ通り、左から書くのです。吉田さん、分りましたか。石盤けして、今井出席の早う来ぬといけぬぞ、長なにか、石盤けし、返らまつすぐに返して書かぬかいけませぬぞ。田村宗一さん、大竹さん

△青山秋(九堂)  
函内市に現在、広瀬  
松村外村和子夫人の  
教授  
△山崎元輝氏(三)



△ 十下り D

浅利さん、今先生の書いたのを讀んで見たい。

○ 浅利 二足す四は何ぼか。

○ 先生 山縣さん今度讀んで見なさい。

○ 山縣 二足す四は何ぼか。

○ 先生 伊藤さん。

○ 伊藤 二足す四は何ぼか。

○ 先生 今度みんな一緒に讀みますぞ。

○ 生徒 二足す四は何ぼか。

○ 先生 さう何ぼかになりますか。おとらしい人に言はせますぞ。高橋さん。

○ 高橋 六になります。

○ 先生 さう出来た人手をあげて、よし、さうです。今晝を書いて調べてみます。これを皆一緒にかぞへます。

○ 生徒 一二三四五六

○ 先生 高橋さんの言ふ通り、六になります。何ぼかを消して6を書きます。皆この通りに書いて見なさい。

○ 先生 體をまつすかしてかゝぬといけませぬぞ。小野さんは又體が曲つてをるぞ。

○ 先生 吉田さんのは何ぼかの所に何を書くのですか。――書きましたか。出来た人手をあげて。よし。石盤けよ。

○ 先生 三つ三は何ぼか。

○ 先生 出来た人手をあげて、毛利さん

○ 毛利 六

○ 先生 三つ三は何ぼか。

○ 先生 出来た人手をあげて、毛利さん

○ 毛利 六

○ 先生 三つ三は何ぼか。

○ 先生 出来た人手をあげて、毛利さん

○ 毛利 六

○ 先生 三つ三は何ぼか。

○ 先生 出来た人手をあげて、毛利さん

○ 毛利 六

△ 教師 板書

△ 板書の△印ミ

○ 先生 さう出来た人手をあげて、よし、さうです。皆この通り石盤に書いて今毛利さんの言う通り6を書きます。又ん

○ 先生 何ぼかを消して其處に書くのですぞ。

○ 先生 出来た人手をあげて、中々よう皆

○ 先生 出来ました。晝で算用する人がありま

○ 先生 つか。毛利さん出て見ませう。今伊東

○ 先生 さんと毛利さんがいって繪をかいて算

○ 先生 用します。これで宜いか皆一緒に調べて見ます。

○ 生徒 一二三四五六

○ 先生 間違はりますまいか、夫で

○ 先生 皆何ぼかを消して6と書きます。伊藤

○ 先生 さんのを調べて見ます。

○ 生徒 一二三四五六

○ 先生 石盤けして。エー山縣さん

○ 先生 かう云ふ標を知つてをりますか。

○ 先生 山縣

○ 先生 分ける。

○ 先生 まだ外の説方は。春本さん

○ 春本 倍

○ 先生 關谷さん

○ 關谷 割る。

○ 先生 月本さん

○ 月本 足す。

○ 先生 松尾さん

○ 松尾 いち。

○ 先生 松尾さん

○ 松尾 いち。

○ 先生 松尾さん

○ 松尾 いち。

△ 松尾法(得新了屋)

○先生 緒方さん

○緒方 ひく。

○先生 此内で今度日ニと×とどちらか数が多くなるかの。江藤さん。

○江藤 わる。

○先生 まを違ふ人。春本さん。

○春本 倍。

(鐘鳴る)

○先生 今日日皆色々算用しましたらう。今日日小野さんどんを算用としましたか。

「ガヤー(言ふ)」

今日日筆の算用、鳥の算用としましたらう。 禮。

(珍らしい御投稿を感謝致します。此生徒達が今皆紳士になつて居ります。果を見たらどんなに驚くこととせう。尚練習帳は本誌に掲げる處とが出来ませぬが、學生一同非常に興味を以て拜見しました。厚く御禮を申述べます。)

(編集者附記)

○原文のまゝと期し、仮名づかいは勿論漢字も当時(昭和五年)の旧漢字体によりました。

○文中の人名は特に一年生の氏名消息はつては幸い、菅一郎氏にきき、又佐伯小学校の卒業名簿によりましたか、不明の方もあります。脚註設りの点御教示下さい。

○郷土の教育史の資料として、面録を貴重にするべきです。各校関係に配付の予定です。

△授業終了の礼 (教師の会堂によつて起立し、礼をうけ)

研究

肥後に落ちた惟栄と統幸

— 林田氏の研究について思う —

会員 佐 賜 賢 一

去る十月中旬、熊本県下益城郡松橋所の林田憲義氏から一通の親書を頂戴した。林田氏は同地の御土史家で、さきに羽柴先生からお名前を聞いていたので、何事かというと聞いたらところ大略次のような文面でした。

「私の所の浦川内というところに緒方惟義の墓と称する墓のがあり、遺跡や伝承も残っており、又子孫という所には佐伯惟定の子統幸が来住土着し、その子孫とよばれる数家もあり、ここには統幸以後の系図も残されています。これらの事について調査を開始しました。この二人共に御地地方の人物のこととて、私の県には何らの資料がなく、もつとも東鑑とか源平盛衰記或は平家物語、更には西国太平記などがあるにはあります。極めて皮相の事のみしか書かれておらず……云々」と、私が佐伯史談誌上に發表した『大神姓佐伯氏の系図』について説明された。私は旧稿を点検し、い友らないところを正補して十一月上旬、林田氏あて送ったが、萩尾というところにある佐伯統幸の子孫について詳細を知りたく、その子孫の系図字して御恵賜下さるようお願いした。林田氏は折返し、つそく御返書下され、肥後國誌その他史料にある緒方惟義に關する伝承、佐伯統幸家の伝承、系図等とを送って下さる。この史料は私どもの佐伯氏研究にたいして重要な資料である。以下にこれを復写する。